



I-OWA マンスリー・セミナー講演より 歴史的視点から見た世界の課題

講演： 出口 治明氏
レポーター：川元 由喜子

世の中を正しく見るというのは、実はとても難しいことです。ありえないような嘘が、世の中にまかり通っているのを見ると、その難しさが分かります。正しくものを見るためには、数字、ファクト、ロジックで捉えることが必要です。歴史学もそうなのです。

今の歴史学の基本は、19世紀頃のイングランドやプロイセンで出来ました。大英帝国を作ったイングランドは、「こんな偉業を成し遂げた自分たちの先祖は誰だろう」と考えました。「のし上がった成金は家系図を作る」という冗談がありますが、大英帝国も然り。そこで彼らはローマを発見し、「ローマこそ自分たちの祖先だ」という意識で歴史を書いたのです。



一方イングランドを追いかけていたプロイセンは、ローマ帝国をやっつけたゲルマン民族という概念をでっち上げましたが、喧嘩が強いただけというのでは納得できず、ローマに対してギリシャを発見するのです。我々が西洋史というとギリシャ・ローマから始まると思うのは、これをそのまま輸入しているからですが、20世紀になって、歴史学は大きな転換点を迎えます。フランスの歴史学者ブローデルが、歴史を「大・中・小」に分けたのです。

「大」は地理的条件や気候です。フランスのブルボン王家がハプスブルクを忌み嫌ったのは、ハプスブルクがドイツとスペインを持っているからです。挟まれていて楽しいはずはない。こうした人間力ではどうしようもないことが、歴史のベースにあるのです。その次の「中」は、「存続したい、繁栄したい」といった家や一族の意思、あるいは戦争。最後の「小」として、有名な事件とか大將軍の存在といったイベントがあるのです。昔、学校で習ったのは、ここでいう「小」が多いんですね。

このあとをウォーラーステインという人が継いで、「世界システム」という概念を作り上げました。世界は全部結びついていて、全体をシステムとして捉えなければ、歴史はわからない。大・中・小が、



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

一つの地域を重層的に見るのに対し、今度は横のつながりです。荒っぽく言えば、イングランドとプロイセンで始まった歴史学が、ブローデルとウォーラステインによって、重層的かつ横の広がりを持って、今の歴史学が出来ているのです。

運用においても、これから発展する国に投資しておけば大体儲かるのですから、大・中・小で歴史を見るというのはすごく大事なことです。そういう意味で一番安心できるのは、アメリカでしょう。広い。資源がいっぱいある。先進国でありながら人口が増える。これは強い。「大」の見方では、こういうことが言えます。

もう一つ大切なのは、「世界中の優秀な人が喜んで来る場所があるか」ということ。今の日本のように、排他的で外国人が怖いなどという国は、なんだか心配ですね。アメリカのベンチャー企業のほぼ半分は、外国人が経営者です。優秀な人は昔から、チャンスを求めて世界中を回っているのだから、日本が「栄えよう」、「いい国になろう」と思ったら、人材を世界中から集めなきゃいけないということも、歴史を見れば大体分かります。

講演は、世の中にまかり通る多くの「常識のウソ」で始まり、初めて知る歴史エピソード満載でした。源平合戦で、平家はお腹が空いて負けたのだという話。1 万年以上前に青森と富山で交易があったという話。奈良時代の女帝たちは、当時、世界帝国を仕切った武則天の影響を受けた実質的な権力者であったという話。ゲルマン民族と五胡十六国は同じ遊牧民が東西に分かれたものだという話。指導者の存在が歴史に与える影響は大きいということ。歴史的事実は全て、科学的分析によって突き止められるということ。だから歴史は語り手によっていくつもあるのではなく、ただ一つであるということ。最後に、昨今の日中関係について、またライフネット生命の現況についてもお話がありました。